
コンビニ・エヴォリューション

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニ・エヴァリューション

【NZコード】

N5320D

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

未来のスーパーはとても発達していた！でもコンビニはそのままだった。

未来の世界、右を見ても左を見てもスーパーは大発展を遂げていった！

しかし、そんな中、その周りに散在しているコンビニは、思った以上に昔と変わらなかつた。

それでもしつかりとお寄りくるのだから、やめつコンビニエンスというのは偉大なのだろう。

だが、バイト店員達の向上心は、そんな変わらない店の体系を、果たしてどのように感じているのか？

パワーパーク

PPストアといえば、この世界ではとても有名なコンビニである。コンビニと言われば、これとあと二つがパツと出でてくるほど、日本で知らない奴は非国民だと極端なことを言われてもおかしくないぐりいだ。

経営はそれ故にとても安定していた。でも、店員達の向上心は留まることを知らなかつたのだ。

「先輩」

「なんだよ大木田」

「目の前のスーパー見てくださいよ」

「ああ、すごいな」

「ロボット売つてるんですよ？ 何のために使うかわからないけど、ロボット売つてるんですよ！」

「そうだなあ……あ、いらっしゃいますー」

「比べてうちは、どうですか？」

「肉まんですねー、120円です。丁度いただきます。ありがとうございます」

「ございました」

「見てくださいよ」れ。変わらぬ味、変わらぬ形の肉まんですよー。！」

「お前さあ、人が仕事してる時に後ろで騒ぐなよ」

大木田はやかんが沸騰したみたいに怒つて暴れた。後ろにあつた映画のDVDコーナーの棚が少し崩れた。

「先輩は！－ 悔しくないんですか？！」

「俺、別に社員じゃないし」

「このままじゃ、客がみんなスーパーに取られちゃいますよ－」

「ちゃんと客も来てるよ。あ、いらっしゃいませー」

「…………」

「157円です…… 557円頂きます。おつりは400円一度に……」

「あー嘆かわしい。ビリしてコンビニは進歩しちゃいけないんだ……」

「……」

「ありがとうござましたー。とりあえずお前仕事しり」

先輩が大木田の尻を蹴り飛ばした。「もつともな話だつた。でも先輩、このままじゃやる気出ませんよー！」

「店長に言いつけるぞ、コイツは……」

大木田は床に寝転がると、黙々つ子のように騒ぎ始めた。地面でしかも体を回転させている。

そんなに悔しいのだろうか、と先輩は面倒くさくなつたので無視した。

「大体パワーパークつてなんですか？！ 力公園つて意味わかりませんよ？！」

「静かにしろよ。お客がいるんだから」

「ヤダヤダヤダ－－－！ なんか新しいこと出来なくちゃ嫌だ－

－－－！」

「お前電子レンジの中に詰めて破裂させるぞ」

「それは嫌です」

ムクツと大木田が起き上がった。頭に埃がついていたので、先輩は怒りをこめながら、彼の頭をバシバシ叩いた。

また泣きそうになつていじける大木田。イライラが募る先輩。そ

んな二人の間に、店長がヒヨコシとやつってきた。

「確かに飽きてくるよねえ」

「て、店長」

「大木田の気持ちわかるよ、うん。つまんないよね

「店長、何言つてるんですか」

「やつぱりコンビニも進化しないといけないんだよ

「そうですよね！？」

大木田の目が輝いた。先輩はこれぐらいのやる気出して仕事をしようと殴りたくなつた。

「でもや、スーパーと同じ」としてもつまらないじゃないか

「うーんやつすると、どこで差別をつければ良いんでしきう？」

「あの仕事……あ、いらっしゃいませー」

一人が悩む。先輩は仕事をする。理不尽な構図だ。

「あー！ 僕いい事思いつきました！？」

「本当かね」

「はい、電子マネー2000円分ですね。少々お待ちください、手続きをいたしますので……」

大木田が何か紙に図を書く。店長はそれを見てうんうんと頷く。先輩は電子マネーの用紙をお客に渡す。

「君ー！ これは面白いよー… 天才的だー… よし、今から早速工事にとりかかるつ」

「本当にですか、ありがとうござりますー！」

「またのご利用をお待ちしております… つてお前等仕事しろよー…」

「先輩。店じまいですよ」

「え？」

何がなんだかわからなくなつた先輩は、呆然としている一人を見めた。

「今から工事だ。これはきっと客が増えること間違いないしだが… うわはははははー…」

「…………」

先輩は、あまりの怒りに、後ろのDVDコーナーの棚をぶん殴つた。陳列されていた見本のDVDケースがポロポロと落ちて、店長の禿頭に直撃した。

数日後。あつという間にコンビニの改装が終わつた。

新装開店とデカデカと告知されたコンビニは、町の住民の興味をそれなりに集めた。

そして早速、一人の客がコンビニの前に現れた。客は唖然としてそのコンビニを眺める。

「……なんで四階建てになつてるんだ？」

PPコンビニエンスストアと、ドデカイ看板が設置された横には、エレベーターとエスカレーターが設置されていた。

どうしてこんなデパートみたいになつてるんだろうと疑問を持ちつつも、客は一階の扉を開けようとする。

「あれ？」

ガタツガタツ、という音がするだけで、開かなかつた。よく見ると、四階からお入りくださいと書いてあつた。

仕方ないなあと客は横に周つた。とのあえずエレベーターを使うまでもないと思つた客は、エスカレータまで行つてみるが、これもまたすこかつた。

見上げても上の様子がさつぱりわからないぐらい、そのエスカレータは長大だつた。おまけに昇りしかなかつた。

昇りしかないことに疑問を持ちながらも、客は少し恐れを持ちつつも、足を運んだ。

「……どうして途中で降りられないんだよ」

混乱しながらも、客は出来るだけ静かにエスカレータに乗つていた。でも、途中で長すぎだと思ったので、歩いて飛ばした。

本当は、エスカレータを自力で上がるということはいけない行為であったが、もう既に常識はずれのコンビニだったので、彼の知ったことではなかった。

上まで必死の思いであがつてみると、そこでは笑顔の中年男性、つまり店長がお待ちかねであった。

物凄い満足気というか、自信たっぷりといった店長は、早速その客を店まで案内した。

店の商品の並びを見てみれば、ほとんど内容は変わっていないかった。食品関係は勿論、飲料水、雑誌、通販、電子取引機械が並んでいるだけだ。

一体何が変わったのだろうか……と思いつながら彼は弁当と雑誌と飲み物を抱えて、レジへと向かった。

しかし、見渡す限り、レジはどこにもなかった。

「お買い上げですか？」

「はい」

「ではこちらどうぞ」

ノリノリの店長に紹介されていくと、そこには意味不明なものが設置されていた。

「すいません」

「はい。なんで『ございましょう』

「これ……なんですか？」

「見ての通りでございます」

「どうするんですか？」

「レジに通じてますので、どうぞ『お滑り』ください

「……あの」

「どうぞ『お滑り』ください」

店長が笑顔で圧力をかけてくるので、客は仕方なくそれを使うことにした。他に帰還手段もないようなので、仕方なかつた。

男は滑るために、その場に足を前に広げて座り込んだ。そして自分で自分の体を押して、そのウォータースライダーから滑つた。

シユ――――ツ――！　と水飛沫をあげながら、男は滑つていつた。

彼の履いているGパンはびしょぬれになり、シャツはグショグシヨに濡れて肌に張り付き、生々しい肌の色を映し出した。

一番被害甚大なのは靴下。子どもの頃、こいつら濡れた靴下のまま遊んだ記憶が彼にはあったが、もう樂しめる年ではない。さらに勢いよくスパー――ツと滑つていると、途中横からゴースに向かつて滝が落ちていた。それを客は見事にザバ――ツと被つた。

それが二・三回続いたところで、ようやくウォータースライダーの「ゴール」が見えた。最後には、客を受け止めるためのプールがちゃんと待ち構えていた。

ザブ――――ン――――

「お、先輩。客が来ましたよ」

「そうだな」

「第一号ですよ。興奮しますね――！」

「弁当がバラバラだな」

プールには、弁当の中身が散乱していた。雑誌も浮かんでいた。お客様も浮かんでいた。

仕方ないので、先輩は客のところまでいって、大丈夫ですかと声をかけた。

それで我に返った客は、死んだような目のまま、散らばった弁当を出来る限りかき集め、落ちた衝撃で手から落ちた飲み物と雑誌も拾い集めた。

「いらっしゃいませ――――――！」

大木田は、物凄い元気に接客挨拶した。

「3点ですね。お会計いたします」

客は、ビショビショのまま大木田のことを眺めていた。

「お弁当温めますか？」

非の打ち所の無い笑顔で、とても明るく弁当のことを聞いてくる
彼に、お客様は暗い声で答えた。

「その前に商品を取り替えてください」

「はい。店長――！ タッキーのお客様の商品、スライダーに流して
ください――！」

「やっぱりいいや。飲み物だけでお願い」

お客様は、諦めてそれを断つた。

「それと……」

「はい。電子マネーをお買い上げですか？」

「いやや。この携帯電話弁償して」

そこには、画面がブツツと切れた携帯電話が、カウンターに差し出されていた。水没したのである。

それを見た大木田は、しまった、こんな時のことを考えてなかつたーという顔をして、先輩を見た。

先輩は、そんな彼に対し、目が笑つてない笑顔のアイコンタクトで返した。「知るか！」と簡潔に。

「では、我々が責任を持つてこちらは弁償させていただきます……
とほほ」

大木田が、とてもしょんぼりとしながら客に謝罪をした。自分が弁償する羽目になりそうなせいか、彼は涙を流していた。

だが、そんな彼に対して、客はさらに容赦なく注文をつけてきた。

「もう一ついいかな」

「はい……なんでしょう」

涙ぐむ大木田に対して、客は、体をガクガクブルブルと震わせながら近づいてきた。

何とも言い難い威圧感に大木田も震えるが、そんな彼をさらに脅すように、客は詰め寄るようにして顔を近づけて、いつ言った。

「い、今の……もう一回やらせてくれ――！」

「え――――つ？！」

先輩は驚いて、プールの中へとずつこけた。彼のポケットに入っ

ていた携帯電話も、水没した。

一週間後。コンビニはあつという間に潰れた。

「なんだってんだよ、こんチクシヨオオオオツ！…」

先輩はキレて、自分が働いていたはずの店の壁に、スプレーで畜生といくつもいくつも落書きをした。

数分で警察に捕まつた。

(後書き)

ハイパーなスーパーがやたら好評で、うれしくなつて書いてしまつた作品。そしたらとんでもない駄作になつてしましました。先輩に愛の手を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5320d/>

コンビニ・エヴォリューション

2010年10月8日15時50分発行